
メデタイ奴の言うことにや

Rail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メテタイ奴の言ひことひや

【NZコード】

N1947S

【作者名】

Rail

【あらすじ】

四月、とある料亭の厨房で年若い料理人があるものを料理しようとしたのだが？

よ、兄ちゃん。大丈夫かい？ 随分手が震えてるじゃねえか。ひょっとして、あれかい？ 僕みたいな立派な鯛をさばくのは初めてかい？ 兄ちゃん若いもんな。ならしじつがねえや。誰だって初めての時は緊張するもんや。

おや、その様子だともしかして、俺の声が聞こえてるんじゃねえか？

やつぱりそうか！

はあー、長生きはするもんだねえ。俺の声を聞く人間がいるとは思つてもみなかつたよ。

いやいや、そんな化け物を見るような田で見ないでおくれよ。逃げる必要なんてこれっぽっちもねえや。俺は至つて普通の鯛だ。

え、普通の鯛は喋らない？

……まあそれはそれだよ。俺にだつて事情はあるまあんだから。

へへ、事情が気になるだり？ ビうしてもつて言つながら話してやらねえこともねえんだけどな。まな板の上の鯛だもの。あとは料理されて食われるだけの運命だしな。

ただ俺の口は回りが悪くってねえ。え、今でも十分回つてるつて？ いやいや、こんなのはまだまだ鎧び付いた車輪みたいなもんさ。けど日本酒の一杯でも引っかけりや、あつと驚くほど上手に喋れるつて寸法さ。どうだい、兄ちゃん。ここ、厨房だ。兄ちゃんの格好からすると日本料亭と見た。

あるだろ、大吟醸。な、頼むよ。一口だけ！ 一口だけでいいか

……はあ、生き返るねえ。こんな良い酒を飲んだのは久しぶりだ。

なんだって？ 鯛は酒が好きなのかって？

……いやね、ここだけの話、兄ちゃんだけに特別に教えることなんだがね、ちょっと耳を貸しておくれよ。

実はね、俺は昔、人間だったんだ。

信じてない顔だね。まあそう思つ氣持ちもわかる。人間が鯛になる、なんてそういうない話だものね。

ここでちょっと俺が鯛になっちゃったまでの経緯を聞いてくれよ。

俺は昔、口クデナシだったのよ。

おつかあには冷たく当たるし浮氣はする、機嫌が悪ければ娘殴つたし、おつかあがそれを庇えばおつかあを殴つた。娘をなでたことすらなかつた。

それでもおつかあが頑張つてくれたから娘も立派になつて嫁に行くことになつた。

娘婿の家がそりやあいい家なんだよ。うちなんか比べ物になんねえくらいの立派な家だった。

両家の顔合わせですつづつて呼ばれたんだけど、その席も娘の

嫁ぎ先が用意してくれたもんで、そりやあもつ豪華な店でじ馳走が並んでたんだ。

それを先方がいちいち説明してくれたんだよ。

これは一人の門出を祝つての紅白かまぼこです、これは錦の卵です、これは一人に子供がたくさんできるようじつてんで数の子です、これは一人の人生が明るく見通せるようじつてレンコンです、つな風にな。

他にも伊勢海老だのアワビだの、滅多にお田にかかるねえようなもんがこれでもかつてくらご出されたわけよ。

最初は適当に聞いてたんだが、そのうち嫌な気分になつてきただよ。何しろこいつちは貧乏人だろ、そんな贅を尽くした料理なんて食つたことがねえ。おつかあも娘もうつれしそうな顔するもんだから、俺が甲斐性なしなのを責められてるような気分になつてむしゃくしゃしてきたのや。

で、極めつけが桜鯛だ。

兄ちゃんなら料理人だから当然知つてるわな。

桜の咲く時期に卵を産むために集まつてくる真鯛のことさ。その時期になるとちょうど綺麗な桜色になつてね、味も極上つていうめでたい縁起物の高級食材だ。

その活造りを女将が持つて来てさ、桜鯛のおつくりで「やっこますう、なんて氣色悪い声で言つわけだ。そんでもって娘の婿がさ、この顔合わせのために用意をせました、なんて澄まし顔で言つんだよ。おつかあもおつかあで、こんな立派なもの、今まで食べたことありません！ なんてはしゃいじまつてさ。

もうそれを聞いたらかあーつてなつて我慢が出来なくなつて、何

が桜鯛だ、こんなろくでもねえ結婚、俺は認めねえぞ！ つて怒鳴つちまつたんだ。するとおつかあが呆れ顔でね、この人は自分が桜鯛を買う甲斐性がないからってひがんでるんですよ、なんて相手のご両親に言つわけだ。

そしたらますます腹がたつて、いても立つてもいられなくなつちまつた。

で、ぐわしゃーんと桜鯛の活造りをひっくり返してね、それをわざわざ踏んづけて料亭から飛び出しちゃつたつてわけさ。

そしたらよく晴れた日だつてのに、急に雷が鳴つてね、食べ物を粗末にするとはなんという罰あたりだ！ つて爺さんの声がしたんだ。

そんで気がつくと、俺はまな板の上にいてね、皿の前に包丁を研いでる料理人がいたつてわけさ。

わけがわからずわめいていたが、料理人には聞こえてないようですね、代わりにどこのだれとも知らねえ声が言うわけさ。

貴様が気持ちのこもつた祝いの食べ物を粗末にした天罰だ、これから先お前は鯛として延々と人にさばかれ、食われ続けるのだ！ つてね。

そん時から俺は鯛として料理されて食われて、そんでもた次の鯛に乗り移つてまたさばかれて食われてつてのを繰り返すことになつたわけだ。

それがどうしたことか、祝いの時に使われる桜鯛ばっかりにな。

辛くなかったかつて？

そりゃあ最初は辛かつたよ。包丁で切られると痛いし、俺を食う

奴らはいつの氣も知らないで幸せをうな顔してやがんだからな。

でもな、何回かそうしてこむづけに呪付くわけよ。

俺を食つ奴らはみんな幸せそうなんだ。

桜鯛だからさ、めでたい席に出されてるわけなんだよ。結婚式や見合い、卒業祝いや就職祝い、果ては米寿やら白寿の祝いなんてのもあつた。

祝いの席でや、みんな楽しそうな顔なんだよ。

美味しい料理と美味しい酒、それに加えてめでたいことつてんで、みんな幸せそうなんだ。

結婚式の席なんかだとさ、娘が嫁に行くつてんでずつと泣くのをこらえてる父親もいたし、育ててくれてありがとうって泣く子供もいた。

みんな、感謝してるんだよ。祝つてるんだよ。めでたいことをさ。そこに行くまで支えてくれた人をさ。そんで一生懸命応援して、幸多き人生を願つてる。

とこりうが俺はどうだい?

子供にもおつかあにも、優しくした覚えがねえ。ひでえことしたしてなかつた。

極めつけに、娘の結婚にケチつけて、めでてえ席を台無じにしちまつた。

幸せそうに言祝ぐ奴らを見ると、つづづく自分が情けなくなつてよお。おつかあにも子供にも悪いことしちまつたつて後悔してたんだ。

するとね、俺に罰当てた神様も思うところがあつたんだろうね。いつもみてえにさばかれたと思ったら、娘が目の前にじでーんと座つてたわけさ。綺麗な結婚装束着てさ。

そう、俺は娘の結婚式で出されたわけだ。

娘は活造りにされた俺見て、しつこく泣きだしてね、こいつのさ。

この桜鯛を見ると、おつとうつを思い出す。おつとうつは口クデナシだつた。飲む打つ買ひでおつかあを泣かせて、殴つて、私を怒鳴つた、つて。

まさにその通りで、いや本当に情けねえ。父親を名乗るのもおこがましいほどだ。めでてえ席で口にするもんじやねえよつて一人で落ち込んだじまつてね。

ところがどつこい、娘はこいつ続けたのさ。

けど、私が近所のガキ大将にいじめられてた時には頭から湯気が出るんじやないかつてくらい怒つてくれたおつとうつだつた。私が迷子になつたとき、真つ先に見つけてくれたのもおつとうつだつた。死んじまつたおつとうは、あの世で私のことを祝つてくれるかしら、つてね。

だから俺は聞こえないだらうとは思つたけど、言つたのさ。

娘の幸せを願わねえ親なんているもんかい、不甲斐ない親で改心するのにえれえ時間がかかつちまつたけど、俺はお前の幸せを心の底から願つてるんだぞ、つて。

そしたら天に祈りが通じたのか、それまでしつこく泣いてた娘がはつとして顔あげてね、おつとうつの声が聞こえた、なんて言つんだよ。

そもそもつて泣き笑いでね、ありがとつ、ありがとつて言つんだよ。婿さんも娘の背中撫でながらさ、必ず幸せにするから、天国

の義父さんに見ても、りおりつ、幸せになろうつゝて言つもんだから、娘がしまいに、わあわあ泣いて、せつかくの化粧がドロドロになつちまつた。

でもまあ、幸せそだつたよ、うん。おつかあも、娘のそんな様子見て嬉しそうに泣いてたし。

そういうの、俺の心残りもきれこさづなくなつたつてわけや。

え、なんで未だに鯛なんだつて？

さあねえ。何しろ天罰だから、俺に罰当てた神様の気が済むままでこのまんまじやねえのか？ もしかしたら神様はこっちのことをすっかり忘れてるかもしだねえがな。

別に俺は構わねえんだ。これでも気にいってんだよ、桜鯛。何しろ俺を見る奴みんな幸せそなんだもん。じつまで幸せになつてくらあ。

さばかれる時は多少痛いが、なに、俺も男だ。それくらいに耐えてやらあ。

つてなわけだからわ、兄ちゃんも上手に俺を料理してくれよ。俺を待つてる客がいるんだからな！

わ、ずばつと包一入れてくれや！

「 といふいわれのある桜鯛です」

年若い料理人によつて活造りにされた桜鯛の身の上話を事細かに聞かされ、その上件の桜鯛と視線がばつちりあつてしまつた客は、非常に食べづらかつたといふ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1947s/>

メデタイ奴の言うことにや

2011年4月5日05時17分発行